

ドル/円相場のトレード戦略

【ドル/円 週足】



■中期展望

2019年の展望を考えるに当たり、昨年2018年を振り返ってみると、当初想定していたように2017年と同様のレンジ相場が継続してしまいました。

年間の値幅は10円を下回り過去最少、2017～2018年の2年間を通して値幅は14円に満たず過去最少となり、市場のボラティリティから収益を得ようとするディーラーにとっては極めて厳しい環境となりました。

その大きな要因としては、絶好調だった米国の経済状況にもかかわらず、年初に米国の政策への不透明感からドルが下落したこと、そして年末には米金利のフラットカーブ化やそれに伴う米国株式の大幅下落、米中貿易摩擦の激化などのリスク要因が相次いだことでドルの上値が抑えられたことが挙げられるでしょう。

米国経済が良好であり利上げ予測が続くためにドルロング・ポジションが蓄積される中でもドルが大きく上昇しないという現象は、ドル高派にとって想定しにくい状況であったと思われます。

そのため、年明けの1月3日に108円を割り込むと損切りのドル売りを巻き込みながら、ドル短期に4円以上の下落という動きが引き起こされました。

107円半ば以下では、公的年金のドル買いのうわさもあり、現在ではややドルが持ち直していますが、依然不透明な状況が続いています。

ドル/円相場のトレード戦略

今後の相場は、米経済の成長が鈍化するのか、それに伴って米国の利上げが打ち止めとなるのかが注目されることになるでしょう。

目先は明確なファンダメンタルズの変化が起きることは期待しにくく、米国の貿易交渉の行方が不透明なこともあり神経質な動きが予想されます。

レンジ的には、2017年、2018年の年前半の下落幅はほぼ10円で、現状でも昨年の高値からほぼ10円の調整を行っており、またポジション調整も進んだものとみられることから一段の大幅ドル安には向かわないものと考え、当面は105円～110円程度のレンジ相場となりそうです。

■短期展望

先週は、1月3日の東京朝方にドルが急落し104円台に突入、その後急速に値を戻し108円台で週を越えるという、年明け早々波乱の幕開けとなりました。

今週も、先週の流れを受けて緊張感の続いたマーケットとなりそうですが、値動きとしては107円～109円程度のレンジでの動きとなりそうです。

先週のドル急落でドル買いポジションは減少していると予想され、下押しのエネルギーは小さくなっているものと思われます。

今週は、米中貿易交渉の次官級会談や12月のFOMC議事要旨の発表などがあり、それらの内容に株価が敏感に反応し、それを受けてドルが連動しやすいものと考えます。